

鳩木節子の後日  
甘木数彦

第六章

数日経って、節子は昭平に呼び出された。

「先日はありがとう。おかげで助かった」

目の前の昭平はすっかり調子が戻ったようだった。こうして話しているところを見ると、とても肉体が死んでいるとは思えなかった。そのせいか、嫌悪感も湧いてこない。むしろ異様に低い室温や、そこに居て昭平が平気そうにしていることの原因がはっきりした分、それまでに感じていた気味の悪さが消えていた。

「忠春さんから事情を聞かされたろう？」

「ええ」

「ここでしか生きられないって言う意味が解った。よそじゃなかなか。大変で」

話を聞いていると、常に死の恐怖を意識してしまう辛さや研究が行き詰まっていることへの苛立ち、そしてそれらをどこか平然と受け止めている昭平の意志の強さが感じられた。考えてみれば、死んだ肉体へ閉じこめられた状態で何十年も生き続けるというのは、並の人間には耐えられない状況だろう。

「まあそれで、節子ちゃんにお礼をしようと思って、組織との戦いやら情報技学やらについての資料を見直してみた。頭を使うことくらいしかできんから」

昭平の言葉に節子は違和感をおぼえた。節子にとって、組織との戦いはもう終わったことだった。残っていることといえば、せいぜい今回の化け猫のように、不発弾の回収作業程度のものでしかない。

だから、まるでまだ組織との戦いが続いているかのような昭平の口ぶりは、どこことなく気に入らなかった。

「節子ちゃんにとって、もっとも身近な存在ってのはもういないか？」

唐突に昭平が尋ねた。

もっとも身近な存在。なんとなく嫌な予感がする。頭へ浮かんできた数人の名前を、あわてて打ち消す。

「特に、いません」

そう答えることにどれほどの意味があるのか判らなかった。だが、それ以外の答えを口にするのは恐ろしかった。そんな心の動きを読みとるように、野暮ったい眼鏡の向こうから昭平は節子を見つめた。やがて、その目元がわずかにこわばる。

「そうか。なら、いいけどな」

「それが、なにか？」

「首領ってのは組織と闘う者にとって、もっとも身近な存在だ。だから、節子ちゃんにとって最も身近な存在がヨ号組織の首領となった。首領になる要因が抵抗者にとって身近かどうかはわからないのなら、そいつを倒せば二番目に身近な存在だったものが新たに最も身近な存在になり、首領となる」

節子は笑ったが、無理をしているのは明らかだった。

「でも、壊滅した組織の首領になるなんておかしいじゃないですか。だいたい、どうやって首領に？」

「なら、節子ちゃんが可愛がっていた犬、ノブミツだったか。ノブミツはいつ、どうやって首領になったんだ？ 気付いたら首領だったんだらう？ 何かのプロセスを経て首領になったわけじゃない」

「そんなの、言葉の問題です。昭平さんが正しいなら、組織を滅ぼすために私は身近な人を順番に殺さないといけない」

「そうなるな」

言葉は素っ気なかったが、声は節子を哀れんでいた。

「やめてください。組織は私が滅ぼしました。滅んだ組織の話聞いても、仕方ないじゃないですか」

節子は昭平の言葉を遮って立ち上がった。抑揚や発声が滅茶苦茶になっている。節子は昭平の言っていることが充分にありえると、直感していた。だからこそ聞きたくなかった。

伊助は節子にかまわず続けた。

「きみと親しいから首領だったという『事実』が遡って作られたのか。首領だからきみと親しいという『事実』が遡って作られたのか。原因と結果との後先がはっきりしない。節子ちゃん。これは奇妙で不可解なことなんだ」

節子は昭平から顔をそむけ、立ち尽くしている。その場から立ち去りたいという衝動が、節子を従わせようと激しくもがいている。吐きそうだった。だが昭平の言葉は節子の体と意識を捕えて離さない。

「嘘です」 やっと節子はつぶやいた。「もしそうなら、資料があるはず。伊助さんも教えてくれるはず」

「その伊助くんだよ。節子ちゃん。伊助くんは本当にヤル気がないだけなのか。ひょっとしたら彼も」

限界だった。節子は昭平の部屋から走って出て行った。だが人間を超えた聴力は閉じゆくドアの向こうから、続く言葉を拾い上げてしまった。

「そのことに気付いて、心から身近だと思える存在は持たないようにしているんじゃないのか」

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>